

ナシ「おさゴールド」の急傾斜地における密植2本主枝栽培

北部農業技術センターで開発した「おさゴールド」の密植2本主枝栽培の適応性を但馬地方で多い急傾斜地において現地検討した。その結果、密植2本主枝栽培法は、従来の栽植密度の樹形と比較して、初結実から多収で果実も大果となり、果実品質も同等であることから、早期成園化の手法として有効であった。

内容

「おさゴールド」は、「二十世紀」の自家結実性かつ黒斑病耐病性系統であり、省力、減農薬栽培が可能である。しかし、改植後は収量減が大きいため、早期成園化が普及上の課題となっている。そこで、北部農技で開発した密植2本主枝栽培の現地での適応性を検討した。

香美町隼人の現地ナシ園において、2007年3月に「おさゴールド」4樹を密植2本主枝オールバック仕立てとし、定植（4m×3.5m植え）した（図1）。対照区として、慣行の4本主枝オールバック仕立て4樹を同時に定植（4m×7m植え）した。試験樹の結実は定植3年目の2009年より開始し、樹体の生育、果実品質及び収量を調査した。

その結果、密植2本主枝樹の面積当たり新梢伸長量は、慣行の4本主枝樹よりも多く（表）、密植2本主枝樹の方が生育旺盛であった。また、果実品質

は糖度、熟度（果皮色）とも4本主枝栽培樹と差はなかったが、果実は、4本主枝栽培樹よりも大きくなった（表）。また、10a当たり収量は密植2本主枝樹の方が各年次とも250～380kg程度多かった（図2）。

試験を実施した園は改植園であり、総合的にやや樹勢は弱めであったが、密植2本主枝樹は剪定によって樹体を切り詰めるため、樹勢が強く、果実も大きくなったと考えられ、傾斜地においても早期成園化の手法として有効であると考えられた。

今後の方針

2011～2012年にかけての冬季に発生した雪害を契機として、現地では「おさゴールド」等優良品種への更新機運が高まっている。樹体が大きく折損し、品種更新が一層急務となっている園については、本手法を含めた被害樹の品種更新について、技術的支援を行っていく。

真野 隆司（北部 農業・加工流通部）
（問い合わせ先 電話：0790-47-1230）

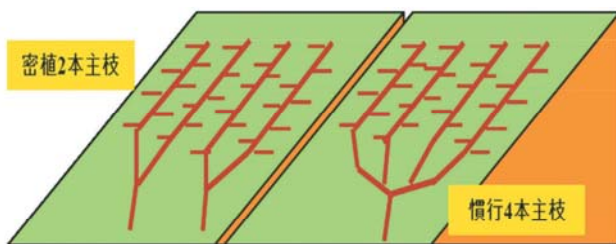


図1 密植2本主枝オールバック整枝（模式図）

表 密植栽培が樹体の生育と果実品質に及ぼす影響（2011）

試験区	単位面積(m ²)当たり		果重 (g)	果皮色*	糖度 (Brix)
	新梢長総計 (cm)	総芽数 (個)			
密植2本主枝	241.9	73.1	383.9	3.7	11.4
慣行	188.9	54.1	326.3	3.6	11.4

*果皮色：旧農水省果樹試作成カラーチャートによる

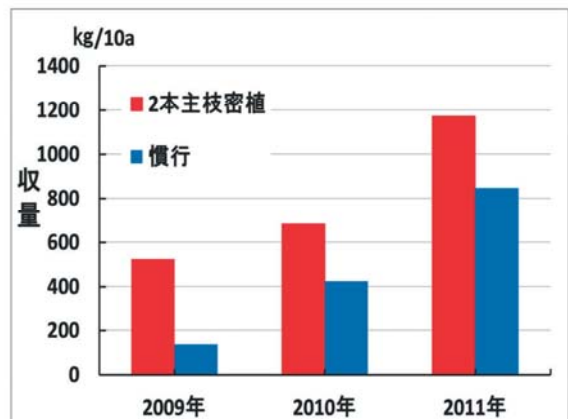


図2 密植栽培が面積当たり収量の年次別推移に及ぼす影響